

人とトキが共生する豊かな地域環境をめざして



ひとも トキも

vol.
4
2012 Jan

野地異鸚朱第三次陕宁陕

加
福



人とトキが共生できる地域環境づくりプロジェクト



SPECIAL REPORT

04 洋県トキ絵画コンクール開催



07 Pickup/トキグッズ



ACTIVITY REPORT

- 02 大使訪問
無錫アジア湿地シンポジウム
- 03 カウンターパート訪日研修
湖北省ドジョウ養殖視察
有機梨研修
- 06 モニタリング研修会
洋県秋季トキ個体数調査
- 07 モニタリング用バイク供与
彫刻器検品



11月、寧陝県にて行われた放鳥での1コマ。入り口を空けられたケージから青空へ、力強く飛び立っていきました。

丹羽大使プロジェクトサイトを訪問 — トキ放鳥実施

10月29日、丹羽大使がプロジェクトサイトのひとつ、寧陝県寨溝村のトキ野生復帰基地を視察するとともに、トキ放鳥を実施しました。

今回の視察は在中国日本大使の陝西省訪問の一環として実施されたもので、大使館からは齋藤公使、青戸参事官ほか、中方は陝西省外事弁公室、省林業庁、安康市、寧陝県の幹部、プロジェクトからは森リーダ、バンディングセンター劉研究員ほかが随行しました。今回のトキ放鳥は寧陝県では2008年以來の4回目で、放鳥数は10羽です。

大使がロープを引き上げケージを開放すると、トキは一羽、また一羽と秦嶺山脈の空に飛び立って行きました。放鳥後、農家の庭先での主婦との懇談



丹羽大使と白永慶陝西省林業庁副庁長がロープを引き上げ、ケージを開放

Cover Story

がセットされ、大使は「人とトキの本当の共存には、農家の皆さんの生活が良くなることが大事。我々も応援したい。」と力説されました。



農家の庭先で行われた大使と農民の懇談

無錫アジア湿地シンポジウムでプロジェクト活動を紹介

10月11日から三日間、太湖のほとり、江蘇省無錫市にて、中国で初めてのアジア湿地シンポジウムが、専門家・研究者、NGO、行政官等約700名の参加により開催されました。

シンポジウムは中国国家林業局、江蘇省政府、ウエットランドインターナショナル及びラムサールセンターが主催、国家林業局賈治邦局長の基調講演のあと、「湿地と森林」、「湖沼」、「湿地と

水鳥」、「湿地と気候変動」など6つの分科会に分かれ、報告とディスカッションが行われました。そのうち「湿地と農業」分科会では、新潟県佐渡市の高野市長が佐渡市の地域づくりの取組みを、森リーダが中国のトキ保護の経緯や有機農業支援などプロジェクト活動の現状をそれぞれ紹介し、日中両国の人とトキの共生の取組みを報告する場となりました。



約700名が参加して開催されたシンポジウム

カウンターパート訪日研修

10月23日から31日にかけて、JICA本部、環境省、佐渡、豊岡にて訪日研修を実施しました。

メンバーはプロジェクトに関わる中央・地方政府機関の幹部で、日本のトキ保護の最新状況に加え、佐渡ではトキ、豊岡ではコウノトリをブランド化することによる地域振興の事例を視察しました。今回の参加者は政策決定に関わる幹部が多く、視察した日本での先進事例を、帰国後ただちに地元にて実現させているようです。

佐渡市では市長をはじめ、市役所の全職員に拍手で出迎えられるというあたかい歓迎を受け、研修者は大いに感動していました。豊岡市では市職員の

先進事例はただちに実現も



[上] 研修に参加したメンバーと平野専門家
[左] 佐渡市トキの森資料館にて解説を受ける研修生

コウノトリにける熱い情熱に感銘をうけたほか、竹野シュノーケルセンターでは、環境教育に関する講義の後、センター眼前に広がる海の中に研修生が文字通り「じゃぶじゃぶ」と入り、3匹のタコを取りました。そのタコを茹でてその場にて皆で食べました。タコは中国の内陸部ではあまり馴染みのない

ものですが、自分で取ったタコは非常においしかったとみえ、いまでもあとのタコの味が忘れられない!と言っているほどです。

これらの事例をモデルにして、プロジェクトでは今後、董寨自然保護区にて講義と実践を組み合わせた環境教育活動を行っていく予定です。

湖北省ドジョウ養殖視察

11月1日～3日の日程で湖北省水産研究所を訪問し、ドジョウ養殖技術について調査を行いました。調査には漢中トキ自然保護区の丁局長や担当職員、農家代表等13名と森リーダ、蘇専門家が参加しました。

湖北水産研究所では雷暁中所長が挨拶した後、ドジョウ研究者の印傑先生よりドジョウの養殖技術の現状について説明していただきました。翌日は、印



傑先生の案内の下で漢中市城関漁場及び天門市渾湖開発区のドジョウ養殖現場を見学し、担当者から養殖技術や飼料の成分、ドジョウ市場等について説明を受けました。保護区では現在、トキの餌としてドジョウを外部から購入していますが、地元で養殖ができるようになれば、農家の副収入になり、保護



養殖場で養殖されているドジョウを確認

区と地元の関係強化にも役立ちます。今回の視察で、農家代表や自然保護区の職員は大いに刺激を受け、洋県でもぜひ試みたいと意欲を見せていました。

有機ナシ栽培管理研修

草バ村は洋県のトキ飼養場に一番近い村です。春は集落の大木にトキが巣を



づくり、夏から秋には裏山がトキのねぐらになっています。草バ村ではナシの栽培が盛んで、重要な現金収入源になっていますが、農業や化学肥料の使用が禁止・制限されているため、病虫害や収量低下に悩まされています。このため、プロジェクトでは村と相談し、既存梨園の一部を有機ナシ栽培モデル園に設定し、併せて村民向けの栽培管理技術研修を実施することにしました。今回の研修は6月に続いて2回目で、10月22、23日の両日で実施しました。講師は漢中市植物研究所、洋県園芸試験場等の地元専門家に依頼し、低毒・低残留性農薬の使用法、収穫、貯蔵、

包装、品質管理等について指導して頂きました。二日にわたる研修会には多くの村民が参加し、熱心に講師の話に耳を傾けました。

今回の研修会に合わせて、プロジェクトから草バ村梨合作社に小型バキュームカーと耕運機各2台を提供しました。村では畜糞等のメタンガス発生装置が普及していますが、定期的な管理が必要です。バキュームカーは発酵槽にたまった汚泥を吸い上げ、有機肥料に活用する新兵器として大いに注目されました。草バ村では、今後もこのような研修会を開催し、村民の技術レベル向上を図っていくことにしています。

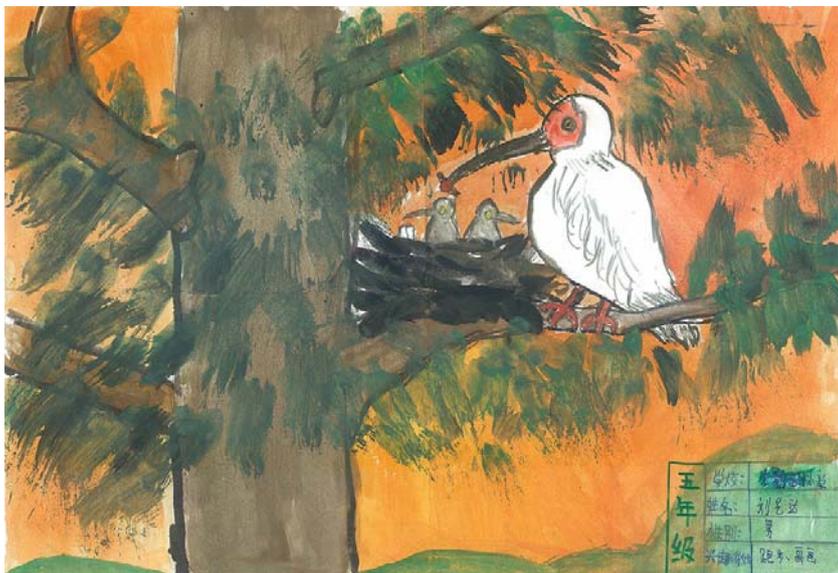
洋県トキ絵画・書道・作文 コンクール開催

150名もの小学生から力作が集まり、トキへの想いが伝わってきたコンクールとなりました。

次号と2回にわたり、絵画と書道の受賞作品を紹介していきます。



JICA特別賞の受賞者へ、森リーダより賞状と賞品を授与

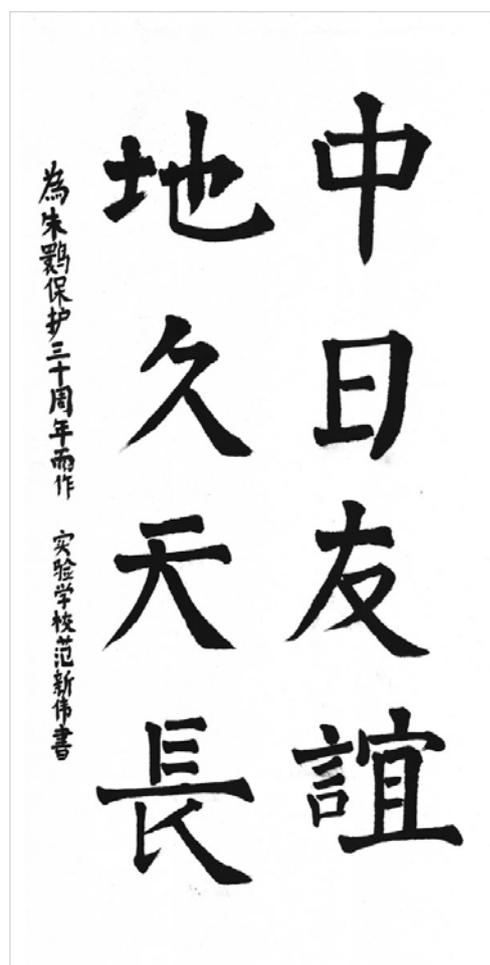


JICA特別賞

刘艺达さん(朱鷺湖小学校)

JICA特別賞

范新伟さん(实验学校)



プロジェクトの環境教育活動の一環として、またトキ再発見30周年を記念してトキ発見の地、洋県にてトキ絵画・書道・作文コンクールを開催しました。JICAプロジェクト、漢中トキ自然保護区、洋県教育体育局、洋県トキ愛鳥協会の共催で実施し、洋県の小学校10校から、約150名の小

学生が出品しました。審査は小学校の先生や地元の絵画・書の専門家、環境教育担当の平野専門家、西安美術学院出身でプロジェクトのパンフレットのデザイン等を担当したアシスタントの小池さんなども参加し、議論しながら公開で進められました。いかにトキを含めた自然環境を理解して

いるのが、技能の優劣以上に重視された点です。

授賞式では、森リーダがプロジェクトの活動を紹介、陝西省林業庁の常秀雲さんからはトキを含めた自然環境保護の大切さを、そして平野専門家からはトキを取り巻く環境を理解している作品が選ばれたという審査の主旨をお



授賞式では、集まった小学生が専門家の話に耳を傾けながら、受賞者の発表を待っていました

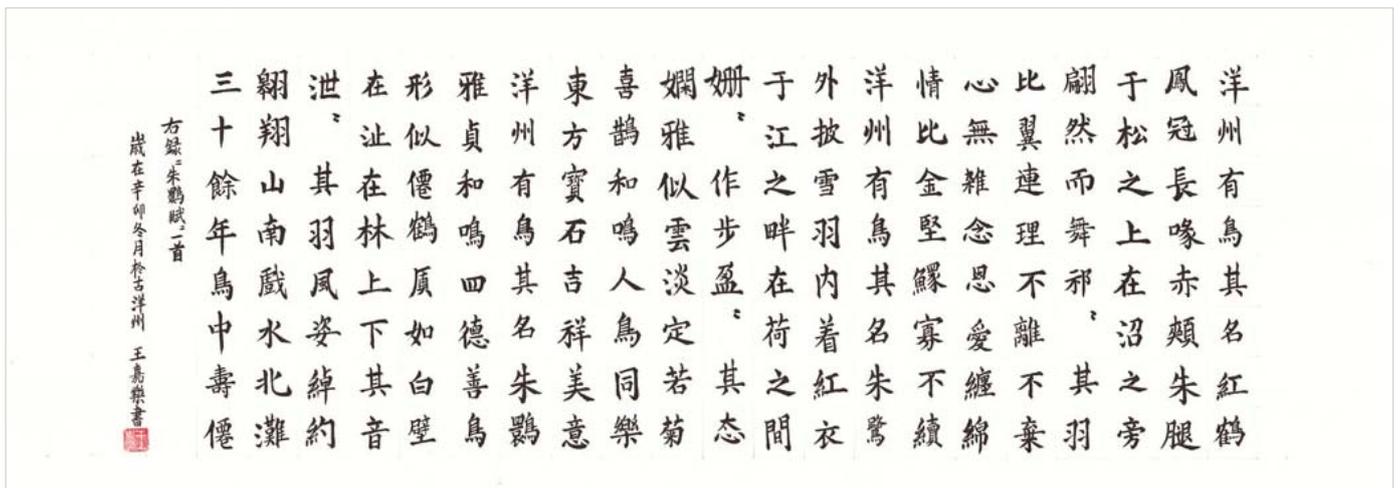


人とトキが描かれた賞状



一等賞🏆

王焜さん(貫溪中心小学)



一等賞🏆

王嘉乐さん(南街小学校)

Special Report

話しました。子どもたちは長時間にも関わらず、静かにそして熱心に専門家の話を聞いていました。人とトキを描いた表彰状は子どもたちに大好評。思いがけずJICA特別賞を授与された子どもの笑顔は、特に印象的でした。このコンテストでは、参加賞としてトキをモチーフにした通学用リュックが提供

されました。「リュックを参加賞として全員に配布します」と発表したところ、子どもたちから大歓声が。子ども達の喜ぶ顔を想像しながら検討を重ねてきたスタッフの苦勞が報われた瞬間でもありました。リュックは子どもたちが安全に通学できるようにとの思いも込めて、デザインされています。

最後に小池さんから、「受賞作品だけでなく、どの絵もすばらしかった。トキを含めた洋県の自然全体を愛してくださいね!」という熱いメッセージが子どもたちに伝えられ、授賞式終了後も子どもたちは小池さんの回りに集まり、もっと自分の作品を見てほしいとアピールしていました。



[上] ねぐらへ飛来したトキの群れ
[下] ねぐらを望む位置でトキの帰りを待つ

洋県トキ秋季個体数調査

洋県では野外に生息するトキの個体数を把握するため、多くのトキがねぐらに集まる秋季に毎年、一斉個体数調査が行われています。調査は前半に対象となるねぐらを特定、後半はねぐらへ戻るトキのカウントが実施され、10月24日より米田専門家と中島専門家が参加しました。夕方になるとねぐらへ徐々にトキが戻ってきます。数が多くなってくると、場所

100羽を超すねぐら入りも

取りのために追い出されたトキが出入りすることもたびたびで、正確な数をカウントするのも意外と大変です。規模の大きなねぐらでは100羽以上が確認されました。こうした地道ともいえる調査の重要性が理解できた一方で、個体数が増加し、生息範囲が拡大し続けている中で、確実に個体数を把握することの難しさも感じさせる調査でした。

モニタリング研修会開催

モニタリングの技術向上を目指して

ディングやテレメトリー調査まで多岐にわたる講義がありました。2日目からは、ねぐらや営巣地、採餌場所などを実際に確認・観察しながら、調査方法について研修が行われたほか、米田専門家による送信器装着技法の指導も行われました。この研修会は参加者にも好評で、技術の向上や記録方法の統一を目指して今後も継続して実施していきたいと考えています。

野外トキのモニタリングに関する技術向上や情報交換を目的としたモニタリング研修会が、11月21日から3日間にわたり洋県にて開催されました。研修には、漢中トキ自然保護区でモニタリングに観察員や情報員として関わる関係者のほか、寧陝県や今後放鳥が計画されている董寨自然保護区の関係者も含め、約40名が出席しました。1日目はプロジェクト専門家やトキの調査研究に関わる専門家により、野外調査の方法や情報収集の仕組み、バン



[上] トキがよく訪れる場所での実地研修
[下] 米田専門家による送信器装着の技術指導



ときエコトートバッグ

11月21日から3日間によって洋県で行われた“トキモニタリング研修会”で専門家や現地調査員のトキモニタリング用として作りました。丈夫でしっかりとした生地に、柄もかわいく、とっても使いやすいとたくさんの人々から温かいお言葉をいただきました。特にトキのモニタリングの協力に必須な農民の人たちからも大好評でした。



オリジナルときマグカップ

トキを生かした新しいおみやげを、と湖南省は醴陵で焼かれた特製マグカップ。柄は全部で5種類。水墨画の情緒溢れる大人っぽいデザインから色鮮やかなかわいデザインまで、幅広く多くの人々に使ってもらえるように作りました。



とき2012カレンダー

農民から子どもまで幅広く、たくさんの人々に使ってもらえるよう、中国の農暦を入れて二種類作りました。一つは季節ごとのトキが見れるトキ写真バージョン、もう一つは洋県でのコンクールで入選した小学生の絵画や書道の優秀作品バージョン。どちらもとてもいいものができました。

モニタリング用バイクの供与

トキのモニタリングでは、山間部や農村部の細く入り組んだ道を行くことが多く、調査や巡回には小回りの効くバイクが欠かせません。

今回、秋の野生トキ個体数調査に合わせて125ccのバイク8台を陝西漢中トキ国家級自然保護区に供与しました。さっそく、調査員たちがそれぞれの担当地区で使用し、すでに供与した四輪駆動車と同様に活躍しています。バイクには「トキ観察中」を示すステッカーも貼られ、普及啓発にも一役買うことが期待されます。



供与したモニタリング用バイクを前に、保護区の翟天庆副局長と



供与された彫刻機。プリンターのようにパソコンと接続して使用します。

彫刻機の供与

中国で飼育されているトキや放鳥されたトキには番号入りカラーリング(足環)が装着されています。野外では望遠鏡などで確認することにより個体識別ができるため、トキのモニタリングには非常に有効ですが、これまでカラーリングは日本の環境省などから提供されたものが配布され、使用されていました。今回、この足環の作成に使用する彫刻機1台を全国鳥類バンディングセンターに供与しました。

足環は、2色のプラスチック板を張り合わせた板の表面を彫刻機で削り、その下にある色を出すことによって、数字などの文字を描き、この板を丸めることで足環が完成します。足環はこれまで各サイトで個別に装着していましたが、今後はバンディングセンターの指導のもと、統一したルールで作成し配布することになり、今後モニタリングや調査データの管理に成果が期待できます。

子どもたちが明るく、楽しくトキを学べるようにと制作した“トキグッズ”をご紹介します。



Pickup



ときリュックサック

子どもたちのために作った特製リュック。目を引くビビッドイエローと元気なトキがこどもの通学を安全に見守ります。



カラフル色鉛筆ノート

表紙にはウィンクする愛嬌たっぷりなトキが、ページをめくると目がさめるようなカラフルなトキたちが子どもたちをお迎え。細かなところまで色鉛筆を使い、すべて手書きで全体を彩り豊かに仕上げました。普段の授業から手紙、日記など使い方はさまざまです。



ときペンケース

元気なカラーとまあるいトキが見た目もかわいく、子供たちに楽しくトキを学んでもらうためのペンケース。“洋県トキ保護30周年記念小学生作文・絵画・書道コンクール”でJICA特別賞の賞品として、マグカップやエコトートバックと合わせて小学生に贈呈しました。

洋県トキ絵画・書道・作文コンクール
作文3等賞作品紹介

美しい出会い

美丽的邂逅

四郎中小学校 6年 王尉霖

今日、私は田畑に横たわり、限らない静けさの中で、世界を忘れ、自分のことも忘れま

した。

少し離れた池のへりにいた一羽のトキが私の眼を引き付けました。それは身長が5センチメートルほどのトキでした。その羽は白く、後頭部には長い柳の葉の形をした冠羽があり、額から頬の皮膚は裸で、鮮やかな赤い色をしていました。くちばしは細長く下向きに湾曲し、全身は豊かで滑らかな羽毛に覆われ、陽光の下できらきらと光り、色鮮やかに輝いていました。二つのきらめく赤い大きな眼の下には、二つのピンク色の鼻の穴があり、とってもかわいらしかったです。

「あら、美しいトキが池のへりでのんびりと散歩していたのですが、どうしたわけか、突然顔つきが大きく変わり、苦しみだしたようでした。さらにときおり痛ましい鳴き声を上げました。「助けて！助けて！」と叫んでいるようでした。トキがけがをしたのではないかと、見に行こうとしたその時に、遠くで六、七歳の男の子が、幼い両手でトキを捕まえようと、手で一生懸命にトキの羽毛を梳いていたのが分かりました。その瞬間、トキは一生懸命にもがき、痛ましい鳴き声はますます大きくなりました。男の子はトキの弱々しい息から突然何かを悟ったようでした。トキは男の子の胸から逃れるとすぐに痛ましい鳴き声を止め、以前の楽しい、自由な様子に戻りました。トキは男の子の回りをぐるぐると飛び回り、男の子にこう言ったようでした。「ありがとう。いい子ね。」男の子はトキに向かって手を振り、去って行きました。

私は午後の間ずっと、夕陽が岸の浅瀬にキスをするまで、ぶらぶらと遊んでいました。私の心呼び戻したのはカワセミの鳴き声でした。私は軽く手を振り、あの美しいトキにさよならを言い、すっぴんいい気持ちで帰りました。

翻訳：李春燕 挿絵：小池真実

本誌「ひととトキも」に関する皆さまのご意見、ご感想をお聞かせください。

✉ toki.jica@hotmail.co.jp人とトキが共生できる
地域環境づくりプロジェクト

〒710082

西安市蓮湖区労働南路296号民航大厦14F

TEL/FAX: +86-(0)29-88793312

<http://www.jica.go.jp/project/china/004>E-mail: toki.jica@hotmail.co.jp

担当:

日本側担当者 平野 貴寛

中国側担当者 索 文娜

i トキ情報コーナーのご案内

西安事務室にはトキに関する情報を提供する「トキ情報コーナー」を設置しています。訪問をご希望の方は事前にご連絡ください。皆さまのお越しをお待ちしております。

● 9:00 ~ 17:00

■ 土曜・日曜・中国の祝日を除く毎日

お断り

本誌は、プロジェクトの近況や情報を率直に読者に伝えることを目的としており、国際協力機構(JICA)の意見を代表するものではありません。

